

子は認められなかった。本症例は、治療開始が遅かったため、造精機能が出現するのかどうか経過を追う必要がある。なお、入院時認められた糖尿病と脂肪肝は食事療法にて軽快した。

6) 甲状腺未分化癌19例に対する EAP 療法の最終報告

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター 新潟病院内科)

甲状腺未分化癌19例に EAP 療法 (CDDP 80 mg/m², ADM 30 mg/m², ETP 60 mg/m²×5) を51クール施行し、次の結果を得た。

1) 抗腫瘍効果は奏効率 68.4% (CR4+PR9/19) で、扁平上皮癌との差はなかった。

2) 延命効果は MST 175 日, 6ヶ月 44.7%, 1年生存 25.6% で, 5年生存の2例がでた。これは非投与群15例に比し有意に延命効果があった。また, CR 導入に成功した4例はいずれも生存している。

3) 延命効果のあった症例は67歳以下で, PS2 以下の全身状態がよく, EAP 3クール以上投与できた症例であった。

4) 5年間再発なく生存している2例の共通点は, 主病巣を切除し, PS2 以下の全身状態がよく, EAP 3クールで寛解導入後, 維持療法を1年間行った症例であった。

5) 死亡した14例中, いわゆる化学療法死と思われる症例が3例 (21.4%) みられた。

7) 身体・精神運動発育遅延を伴ったラトケ嚢胞の乳児例

田村 哲郎・武田 憲夫 (新潟大学 脳神経外科)
田中 隆一

症候性ラトケ嚢胞は稀なトルコ鞍部病変で、症状は通常頭痛、下垂体前葉機能低下あるいは高 PRL 血症、尿崩症など内分泌異常と視神経障害である。今回極めて稀な乳児例を経験したので報告する。症例は入院時11カ月男児。母親は高齢出産で、狭骨盤のため帝切で出生。生後3カ月から目つきの異常に気付かれ小児科受診。染色体異常なし。画像診断でトルコ鞍部病変を指摘され、当科に入院、身長は-2SD 以下、精神運動発育はハイハイがまだで遅れ気味。内分泌検査では、TSH は遅延反応だが T3, T4 は正常。Cortisol 反応も良好。Sm-C は低値で GH は無反応。CT では低吸収域、MRI

では T1 強調画像で髄液より僅かに高信号で、T2 強調画像では著明な高信号を呈する鞍内 mass。CT、MRI とも enhance されず視交叉は軽度挙上されていた。手術で嚢胞壁の biopsy のみ施行しラトケ嚢胞と確認され、内容はムチン様だった。術後内分泌検査では特に術前と変化はみられなかったが、身長発育は停止した。

8) Hyponatremia and Osmoregulation of Thirst and Vasopressin Secretion in Patients with Adrenal Insufficiency

鴨井 久司 (長岡赤十字病院 内科)
田村 哲郎 (新潟大学脳神経 外科)
田中 孝司 (帝京大学第三内科)
山路 徹 (東京大学第三内科)

9) ACTH, prolactin 産生下垂体腺腫の1例

黒木 瑞雄・須田 剛
宇野 初二・関 泰弘 (新潟県立中央病院 脳神経外科)
土田 正
関屋 政雄 (同 病理)
吉川 俊史 (国立高田病院内科)

血中プロラクチン (PRL) 値が異常高値を呈するクッシング病の1例を経験したので報告する。症例は51才、男性。全身倦怠、頭痛、肥満を主訴に内科を受診。精査にてクッシング病と診断。ホルモン基礎値として、ACTH 172 pg/ml, cortisol 26.8 μg/dl, PRL 11.5 ng/ml, GH 1.2 ng/ml であり、また MRI にて海綿静脈洞に浸潤する下垂体腫瘍を認めた。Bromocriptin (Bcr) 投与にてホルモン値は正常化するも、MRI 上腫瘍の縮小効果はなく、頭痛も持続するため当脳神経外科に紹介された。経蝶形骨洞手術にて、海綿静脈洞内に浸潤した部を残し腫瘍を摘出。腫瘍の免疫組織染色では、ACTH が sporadic に、PRL が diffuse に染色された。術後、放射線治療および Bcr 投与にて症状は軽快している。

高 PRL 血症を伴うクッシング病は稀であり、しかも本例のように PRL 値が異常高値を示すものは世界的にもまだ数例の報告しかない。極めて稀な1例と思われるので報告した。